

## ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(12)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、2月27日に行われたウィーン公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

---

Wiener Zeitung  
February 28, 2020  
Jens F. Laurson

### NHK交響楽団 — 研ぎ澄まされた耳で新しい世界を観る 日本のオーケストラが首席指揮者パーヴォ・ヤルヴィと共にコンツェルトハウスで公演

極端な主張をする人によれば、日本はウィーンよりも長いブルックナーの伝統があるという。確かなのは、日本のオーケストラが、伝説的存在である朝比奈隆と彼が率いた大阪フィルハーモニー交響楽団における演奏、さらにそれ以降もブルックナーとは特別な関係にあるという点である。それだけに、NHK交響楽団のブルックナー《交響曲 第7番》を含むコンツェルトハウスでの公演には、同楽団にとって外国でありながら、作曲家のホームグラウンドの地で演奏するという意味において特別な関心が寄せられた。

伝統を誇る日本のオーケストラにとって、この日の公演は最も絶好調とはいえなかったようだ(管楽器もブレが全くなかった訳ではない)。しかし、まるで蝶が羽ばたくかのような金管楽器群の広がりと共に、精気を奮い起こす境目のない驚異的なフルサウンドは、とりわけ第2楽章のコーダでブルックナーを強く印象付けられた。首席指揮者のパーヴォ・ヤルヴィが、このオーケストラとその伝統にいかに深く関わっているかは、例えばhr交響楽団を指揮した演奏と同じブルックナーを遥かにスリムに感じることから明らかだ。

休憩の前は、カティア・ブニアティシヴィリによる煌めきの輪舞を彷彿させるベートーヴェンの演奏だった。大きな身振りによる《ピアノ協奏曲 第3番》は極めてダイナミックでコントラストに満ちた攻撃的なものであった。これはアンコール曲のシューベルトの《即興曲変ト長調 D899/3》と明確な対照を意図したものだったが、均斉のとれたメゾピアノは見事にコントロールされた内容だった。コンサートの最初に演奏された武満徹の後期作品《ハウ・スロー・ザ・ウィンド》は繊細な音楽であり、現代的で捉えやすい響きで表現され、微細な色調、細麗、そして表現豊かな残響と休止を伴う。より追求したいという気持ちにさせる演奏であった。